

## ・パラリンピックの功罪；佐伯典彦（視覚障害者マラソンの伴走実践者の立場から）

平成 29 年 10 月 14 日に、地元で行われた「run 伴」というランイベント（認知症高齢者になっても、在宅生活が継続できる啓発ラン。北海道～沖縄へタスキを繋ぐ…）で、視覚障害者 S 君の約 10 km の伴走をした。ずっと歩道を走ったため改めて思ったが、点字ブロックがありながらも路面はでこぼこ。車道に出るところは、歩道が車道側に傾斜していたり、電柱があるところや電車の高架橋は、歩道が狭くなる…。視覚障害者への声かけには正直苦心した。オリンピックにパラリンピックがあるように、国体の後に全国障害者スポーツ大会がある。今回走った S 君も出場し、800m と 1500m 全盲の部で 1 位と 2 位に入賞できた。障害を持つ人も競技者として活躍できる場があるということは素晴らしいことだし、パラリンピックがあることで、選手を志す人は夢を追いかけることができる。そして、パラリンピックを開催することで、街がバリアフリーになっていけば、そこに住む人・訪れる人に利益が還元される。高齢者・障害者にとって、動きやすい街づくりになっていく方が、開催後にわたって意義があると思う。

私はマラソン伴走を始めて 25 年になる。地元で小さい視覚障害者マラソン伴走のボランティア団体の代表をしている。実は本年 8 月に 2 度目の膝故障の状態のリハビリ中の身であり、仲間の 1 人も交通事故で入院中。故に今地元で走っている S 君や T さんの、複数ある 11 月出場大会の伴走の代理を探すのに苦労した。結果として、地元の仲間・高速ランナーや大阪の視覚障害者伴走の団体が引き受けてくれた。伴走者もそうであるが、障害者にスポーツを教える指導者の不足もよく指摘される。日本障害者スポーツ協会が公認する「障害者スポーツ指導員」の登録者数は、約 22000 人とされるが、この 10 年間ほとんど変化がないと聞いている。2012 年のロンドン・パラリンピックに参加した日本選手が、競技継続のための資金・練習場所や施設・指導者不足を指摘していたが、リオ・パラリンピックの「金メダル」ゼロは、それを如実に語っていると考える。それに比較して、パラリンピック選手も、オリンピック選手のナショナルトレーニングセンターが使えるアメリカ、パラリンピック指導者育成に力をいれたイギリスは、多くのメダル獲得に繋がっていると考える。

小さい障害者伴走のボランティア団体の仲間を募集する時、分かったことであるが、マラソン伴走をしていただけた人は、「福祉発想」ではなく「スポーツ発想」であること。「福祉発想」の部署で募集してもほとんど集めることはできず、マラソンランナーや駅伝チームのメンバーから集めた。都道府県や市町村の多くで、障害者福祉・社会福祉の関係部署が、障害者スポーツを担当しているが、スポーツ担当部署が、何故関わらないのか。障害者スポーツ振興のためには、自治体の機構も考える必要がある。

障害の有無関係なしで、だれもが健康や人生を楽しむためスポーツに汗を流し、その中から明日のアスリートが生まれ、結果的にメダル獲得に繋がれば理想的だと思う。より多くの障害者がスポーツに親しめるよう支援策を検討してほしい。

（さえきのりひこ。名張市役所地域包括支援センター 主任介護支援専門員）